

信 毎 歌 壇

小島 なお選

ぼたぼたと四月の雪が降る朝よ白梅の花とどち
 が重い (松本市) 堀内 悠子
 窓拭けば否のうすきはなびらがひとひらふたひら
 手から放れず (千曲市) 関 津和子
 白杖に歩き始めしあの頃は改札口に鉄の音が
 (千曲市) 上原 博司
 ポスターをはられぬ候補も当選す市議選しく村
 里の雨 (飯田市) 池田 健一
 二時間の通勤解かれ喜ぶも何か導くとスリッパ直
 す (千曲市) 清水 洋子
 水鏡去年より広く輝きて常念坊は足早に消ゆ
 (安曇野市) 中村 玲子
 入学の孫が選んだ(なんちゃって制服)を言はじ
 めて知りぬ (長野市) 宮崎 久子
 朝六時庭の支柱は指定席鳴かぬきし鳩はきつと妹
 (千曲市) 恵 子
 ガラス器に横たわる白アスパラは闇に育ちてディ
 ナーを飾る (千曲市) 倉石みつる
 我がスマホわが亡き後に残された拙き歌の行き先
 を問う (松本市) 降旗 悦二

佳作

猫2匹寄り合い眠る昼下がりがりハビリの人を送り
 て出れば (伊那市) 三沢 琴枝
 亡き母の残した「槽式洗濯機田んぼの泥を落とし
 て回る (岡谷市) 片倉恵美子

選評

第一首、水を含んだ春の雪が白梅の花に。ぼたぼたと降るのは雪か花びらか。静謐な感覚が冴える。第二首、梅とも桜ともちがう杏の淡い花びら。「放」の字に杏の甘えるような感傷が漂う。第三首、

まだ自動改札機ではなく切符を切っていた頃。耳の記憶が昭和の風景を懐かしく思い出させる。第四首、過疎化が進み人口の少ない村の現実。ポスターのまばらな選挙掲示板を春雨がぬらしている。

米川 千嘉子選

換気扇去年はどときスイッチを爪先立ちで菜箸
 で押す (飯山市) 市村紀久子
 新しき配属の部署人のなくデスクに置かれある串
 団子 (小諸市) 加藤 陽介
 「早くから偉いね」といつものレジの女性「時間
 前よりレジに立ちたり (千曲市) 中村 美樹
 高遠の花見のごとき人こみよ廃業近いその酒屋さ
 ん (伊那市) 赤羽 正彦
 ムスカリ色のワンピース着て春の街角導犬の尻尾
 も揺れる (東御市) 広沢里枝子
 地元では昭和を守る支那そば屋店主夫妻の病後気
 遣う (安曇野市) 加藤 文人
 全員が我に向かって笑顔する三十名の選挙ポスタ
 ー (佐久市) 小泉 英介
 時間という飾を通して九十二歳砂金のごとき友
 のいくたり (木祖村) 佐々木千代子
 足の裏こちよこちよすればまた笑ふ力は残して寝
 たきりの父 (松本市) 中村 博穂
 「春の野はすべて食べられる草に見える」わが娘
 は(草摘む家族)に育ち (須坂市) 東郷 雄二

佳作

点滴をしつつ眺めるペランダに止まりし燕待つと
 義母言う (長野市) 青木しげ美
 難病の妻の介護に明け来て春まだ浅き寝床にも
 ぐる (長野市) 丸山 祐司

選評

第一首、換気扇の掃除は難題。背も縮むし高所に手を伸ばすのも怖々と。「菜箸」がリアルで楽しい。第二首、「串団子」は気取らず温かい同僚の歓迎の気持ちのよう。第三首、「レジの女性」が歌を長く

しているが、ここは「人」ではだめなのだろう。自宅の家事はどう回しているのか、見えない頑張りの部分にも同性としての想像が。第四首、「高遠の花見」のたとえは楽しく、店の廃業を思えば切ない。

小池 光選

芽吹く木のまっただ中に佇めばわれは一本のあつ
 き血の幹 (木祖村) 佐々木千代子
 戸隠の雪解け水は澄み切りて神の御加護にイワナ
 が光る (長野市) 室川 志郎
 青春のわがはじまりは通学の自転車で駆けたあ
 ずの花里 (千曲市) 大谷 善邦
 フラウスを物干し竿に広げれば初蝶の来てしほし
 舞ひたり (小海町) 依田 久代
 緋メダカにクレオとハトラと名を付けて四月の第
 一日曜日過ぐ (長野市) 原田りえ子
 蒔絵師の友は将棋も好きだった盤を挟みし日々な
 つかしき (飯山市) 小野沢竹次
 朱鷺色に日暮の街は包まれて少し遅れて月登りく
 る (長野市) 近藤 光子
 山際に灯りを点すスナックのママがグラスに水仙
 を挿す (松川村) 岡 豊村
 階段がエレベーターか迷ひしも昨日も階段今日も
 階段 (長野市) 宮崎 信博
 城下町同心小路に入りたればタイムスリップもの
 のふとなる (松本市) 小松 久志

佳作

行ずりの人より受けし花の種子さて何咲くか楽し
 みつつ播く (松本市) 平林 大衛
 終活を思ひてアルパム広げれば亡き人達の笑顔あ
 ふれる (千曲市) 小西登喜子

選評

第一首、5月になっていつせいにものすごい勢いで木々が芽吹く。その中にひとりに立つ。まるで自分が木になったかのように。生きる充実が感じられる。第二首、澄み切った谷川の光景。イワナが輝

きながら泳ぐさまに神の加護を感じた。うつくしい力があふれる。第三首、雨の日も風の日も自転車で通学した高校時代。春になれば一面にあんずの花が咲く。それがわたしの青春だった。